

第 13 冊

『平安京はいらなかった』

～古代の夢を喰らう中世～

桃崎有一郎、吉川弘文館、2016年

(下)

捨てられる平安京

前回のまとめは、こういうことでした。

私たちが知っている、あるいは教科書などで見たことのある「平安京図」というものは存在しなかった、平安京は「完成した」都ではなかった、ということ。

また、左京がどんどん発展していったのに対して、右京は水はけが悪いということもあり、人口が減少していき、どんどん衰退していったということ、でした。

今回は、平安京を藤原氏や天皇・上皇、さらには、庶民までもが捨てていった様子を見ていきましょう。

桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』のなかで、次のように述べておられます。

元来、日本の律令制は、国際関係の緊張に直面した日本（倭）が、それに対処できる国家の再編成（いわば国家の「近代化」）を目的として成立させた体制である。そして、その基礎となるべき天皇中心の中央集権制を実現する唐風都城は、国際関係上の生き残りの手段として生まれ、友好的であろうと敵対的であろうと、国際外交自体の継続を前提として存在した。したがって、その国際外交という概念が平安前期の日本から消滅した時、存在意義を失うのは鴻臚館や日本と渤海が外交演劇を繰り広げる朱雀大路だけではない。平安京自体が、元来目指した形で存続する理由を失うことに、注意せねばならない。

外交の終焉は、平安京の終わりの始まりであった。

東アジア諸国との外交の終焉により、平安京そのものの存在価値・存在意義がなくなってしまったため、「平安京の終わり」が始まったのです。修理も増改築も困難な状況の中で、平安京を維持するのがやっとでした。

しかし、大切なのは、平安京を維持しようというよりは、「不用である」とか「捨てよう」と考える人が平安京を破壊し始めていったことです。

では、いったい、どんな人たちが、誰が、都を破壊していったのでしょうか？

藤原氏が捨てる

桃崎有一郎氏は、まずこんなことを書いています。

外交演劇の舞台という機能を失った平安京は、もっぱら国内向けの政治的演劇の舞台へと特化してゆく。それは、摂関政治の本格化と軌を一にしていた。

.....

村上天皇が没してその子の冷泉天皇がたつと、藤原忠平の子の実頼が関白となり、以後、摂政か関白（もしくは同様の職務を果たす内覧）が常置されるようになった。藤原氏（の嫡流の北家）の権力は良房・基経以来、飛躍的に高まっており、そしてその地位が制度化する摂関政治の本格化が、この頃始まっていた。

まず、上の説明文の中の「藤原忠平の子の実頼が関白となり、以後、摂政か関白（もしくは同様の職務を果たす内覧）が常置されるようになった」という部分に注目してください。摂政や関白が常置されるようになった事件とは、どんな事件だったのでしょうか？

事件が起きたのは969年のことでした。この事件を何と呼びますか？そして、この事件で排除されたのは誰でしょうか？

事件の名前は「安和の変」ですね。「あんなの、変！」ではないですよ。

語呂合わせは、「クロクモ わきたつ 安和の変」でしたね。藤原氏による最後の「他氏排斥」事件でした。

ここで、藤原氏による「他氏排斥」について、復習です。平安時代に起きた他氏排斥事件を下に列挙しました。「 」に入る事件名、そして（ ）に入る人物名を教えてください。

- ①842年に起きた「」です。藤原良房が伴健岑・()を排除しました。
- ②866年に起きた「」です。藤原良房が()を排除しました。
- ③887年から翌年にかけて起きた「 事件 (の紛議)」です。藤原基経が()を排除しました。
- ④901年に起きた「」です。藤原時平が()を排除しました。

- 答えは、①「承和の変」、(橘逸勢) →→→→→ 語呂合わせは、「はしにも **かからぬ 承和の変**」
 ②「応天門の変」、(伴善男) →→→→→ 語呂合わせは、「**やろう ムカツク 応天門**」
 ③「阿衡事件(阿衡の紛議)」、(橘広相)
 →→→→→ 語呂合わせは、「**基経 怒って パッパッパッ**」
 ④「昌泰の変」、(菅原道真)
 →→→→→ 語呂合わせは、「**きゅうれい 一発 昌泰の変**」 でしたね。

この事件で排除されたのは、醍醐天皇の子で左大臣であった源高明(たかあきら)でしたね。この事件は村上天皇が亡くなったあとに起きました。ところで、この安和の変の歴史的意義は何でしょう？

この事件により、藤原氏北家の地位は不動のものとなり、その後は常に摂政または関白が置かれ、その地位には藤原忠平の子孫が就くのが慣例となりました！！摂関政治が確立し、その全盛期が藤原道長の時代でしたね。

ところで、東アジア諸国との国際関係の円滑化をはかるために存在した平安京が存在意義を失ったのですから、真っ先にその影響を被るのは、どこだと思いますか？

平安京の中でも特に国際関係儀礼の舞台として主要な役割としたのが、「朱雀大路」ですよね。実は、朱雀大路の役割は、まだ残っていました。それは、**大嘗会**(だいじょうえ)の**標山**(しるしのやま、ひょうのやま)巡行の順路となるという役割でした。ところで、**大嘗会**って何でしたっけ？

大嘗会とは、**天皇が即位した後に、天皇自らが初めて新穀を神々に供える祭りのこと**です。これは、天皇一代に一度だけ行われるものなんですね。その際に、即位が七月以前ならばその年の、八月以後ならば翌年の、陰暦十一月の中の卯(う)の日に行われるそうです。

また、標山というのは、大嘗会の時、大嘗宮の前に悠紀(ゆき)・主基(すき)の両国の役人が立ち並ぶ位置を示すための目じるしの榊(さかき)のことです。山の形を作り、木綿(ゆう)や日月などの装飾が施され、大嘗会の前日の卯の日に、斎場から供え物といっしょに運び込まれるそうです。

でも、そのような天皇一代に一度しか行われぬ、頻度がとても低い行事のために、日々メンテナンスがされるはずないですよね。

では、**不要となった朱雀大路や羅城門など平安京の施設はどうなったのでしょうか？定期的に掃除や**

修理はなされたのでしょうか？

桃崎有一郎氏は次のように記しています。

最初に摂関政治時代の洗礼を浴びたのは、朱雀大路の正門・羅城門である。天元三年（980）、羅城門が暴風雨で倒壊した。その再建が企てられたのは24年後の寛弘（かんこう）元年（1004）で、すでに藤原道長が左大臣・内覧としての朝廷の主導権を握っていた時代であった。倒壊後、24年間も放置されたと言うことは、24年間、羅城門が必要とされなかったということだ。この時、再建費用は丹波国の税収から賄われることとなったが、翌年、その財源は大内裏豊楽（ぶらく）院の再建費用に転用することが急遽決まり、羅城門再建は放棄されてしまう。

都の正門、羅城門が、暴風雨で倒壊してしまったというのです。しかも、なんと倒壊してから24年間、そのまま捨て置かれたということですね。修理したり改築したりということは、なかったんです。しなくても、なんの問題も起こらなかったということですね。

さらに、桃崎有一郎氏は続けています。

それだけではない。道長はそれから18年後の治安三年（1023）、法成寺（ほうじょうじ）の新造堂舎の礎石とするため、神泉苑（しんせんえん）の門と乾臨閣（けんりんかく）、坊門・羅城門・左右京職や寺々の礎石を取り去ってしまう。

えっー、摂関政治の中心人物の藤原道長が、法成寺の礎石として使うために、神泉苑の門や乾臨閣、羅城門・左右京職などから奪ってしまったのですって！！これって、無茶苦茶「私用」じゃないですか？まさに、公私混同ですよ。今の日本でいえば、安倍総理大臣が自分のために国の施設を流用しているみたいなものですよ。これは、あかんですよ。

でも、当時としては、絶対権力者の藤原道長がすることですから、誰も刃向かう事なんてできなかったと思います。

ちなみに、この神泉苑ですが、現在も存在しています。今の二条城の南に、残っています。

天長元年（824）に、西寺の守敏と東寺の（ ）が祈雨（きう）の法（雨乞い）を競い合うことになりました。その結果、（ ）が天竺の無熱池から善女竜王を勧請し雨を降らせることに成功し、守敏に勝ちました。

（ ）に入る人物は誰でしょうか？

そう、空海（弘法大師）です。

そのとき以来、神泉苑は重要な国家的祈雨の場であり、乾臨閣はその中心的な建物でした。ですから、権力者藤原道長が各所から礎石を持ち去ったという事実は、羅城門・坊門という朱雀大路の出入り口や、検非違使に職掌を吸収されて形骸化した京職の庁舎が、すでに消失していたことを意味します。まさに、平安京の主要な施設のいくつかが、破壊・消失しているという事態になっていたのですね。

付言しますと、貞観5年（863）に、都に疫病が流行り、神泉苑で御霊会が行われたことは有名です。また、貞観11年（869）には、神泉苑の南端（現在の八坂神社三条御供社）で、その当時の律令制度の国の数である66本の鉾（ほこ）を立てて、祇園社から神輿（しんよ）を出したことが、現在の祇園祭の元になったと言われています。

話を元に戻しましょう。持ち去られた礎石は**法成寺**に転用されました。法成寺は藤原道長が創建した寺院です。寺域は東側で鴨川に面したため「中河の御堂」と呼ばれました。現在の、鴨沂高校や府立医大付属病院のあたりに法成寺が建立されたのです。

ところで、藤原道長が残した日記は「**御堂（みどう）関白記**」といますね。2013年に、「御堂関白記」は日本で初めて、**ユネスコ（国連教育科学文化機関）の世界記憶遺産**に登録されました。この時にもう一つ「**慶長遣欧使節関係資料**」も同時に登録されました。

この「御堂」というのが、藤原道長のことですが、「御堂」とはもともと法成寺のことをいいました。ちなみに、「御堂**関白**」とありますが、**藤原道長は関白になったことはありませんか？**

答えは、関白になったことは「ない」ですね。



鴨沂高校の北にある
法成寺跡の石碑

桃崎有一郎氏はこのことを次のように言い切っています。

法成寺は宗教的側面における彼の権勢を象徴する寺院であった。つまり、右の諸施設からの礎石の転用は、道長が主導する摂関政治が、かつての平安京の設計思想・構造を犠牲にし、これを上書きする体制として現れたことを示す現象に他ならない。

さらに、こう付け加えます。

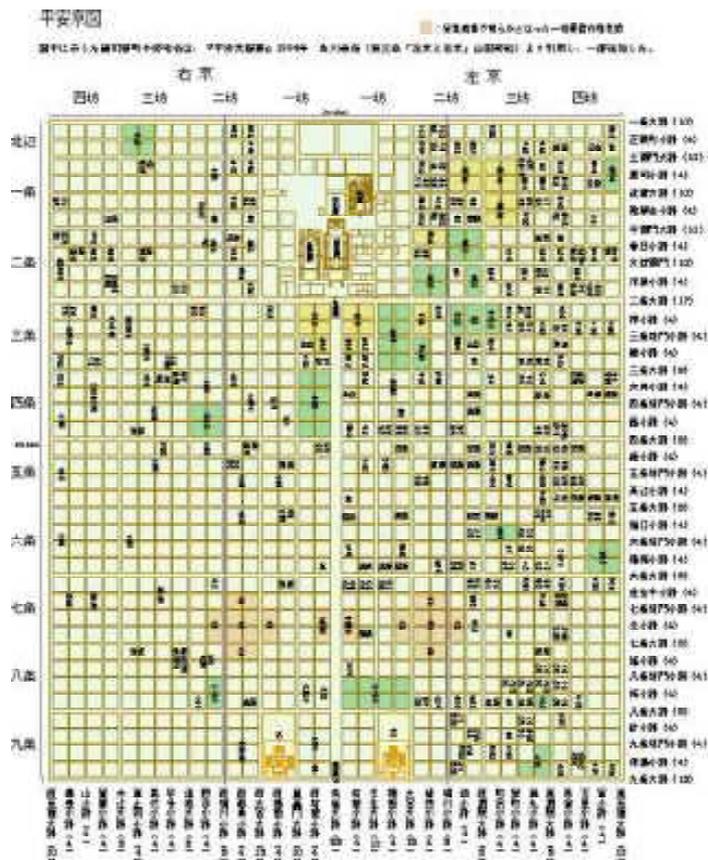
摂関政治の絶大な権力と財力は、平安京を再建する方向には働かなかった。摂関政治にとって、平安京の物理的に壊れかかった部分は、修復・維持する対象ではなく、むしろ積極的に分解して、別の何かを、つまり摂関政治全盛期という新時代にふさわしい別の記念碑（モニュメント）を造るために、材料を調達できる廃品資源の山、再利用可能な資源の回収場所に過ぎなかった。そうして造られた法成寺のような記念碑が、古代「平安京」を中世「京都」へと再構成してゆく。いわば摂関政治は平安京の残骸を餌として「食い」、消化して、中世京都を造る栄養素へと変えていったのである。・・・・・・・・

自分の身体の一部を分解し、それを再び自分が「食べて」栄養素にしてしまう「自食」＝オートファジーこそ、まさに平安京で起こった現象に他ならない。中世京都への転生という現象は、「平安京の自食（オートファジー）」と表現すると、最も適切にイメージしやすい。

桓武天皇が「造った」平安京は、あまりに巨大であったがために、しかも住人にとっては極めて住みにくい不便なものであったがために、大事にされませんでした。そして、時代が進むにつれて、あちこちが傷んだり、壊されたりしていきました。

本来ならば、修理したり改築したりすべきですが、それが行われませんでした。そんなものに金や労力を使うよりも、藤原氏たちは、自分たちが権力を持っているということを誇示するため、あるいは浄土教や末法思想の流行を背景に、西方浄土へ往生できるよう莫大な費用を使って法成寺や宇治の平等院などを建立しました。

その際に、平安京に残されていた様々な施設を「有効に」使って、法成寺などを建立していったんですね。このことを桃崎有一郎氏は「自食」＝「オートファジー」と表現されているのです。まさに、言い得て妙ですね。



京都市埋蔵文化財研究所より

住民が捨てる

摂関政治において、藤原氏にとって、平安京は不要なものでありました。いや、法成寺など建設のための資材としては必要であったと言えますが。平安京に住んでいるのは藤原氏のような貴族だけではありません。平安京に住む一般市民にとっては、平安京は必要なものだったのでしょうか？

桃崎一郎氏は『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』のなかで、次のように述べています。

朱雀大路が、『延喜式』制定の延長5年（927）段階ですでに、屋は多数の馬や牛が屯する牧場になり、夜は盗賊のねぐらと化すような、荒廃した空間であったという。

日本の中心となる、最も文化的・文明的・先進的な、天皇の膝下の都市の最も重要なメイン・ストリートが、放牧地という田舎じみた景観や、犯罪者の巢窟というスラムじみた景観を見せていたこと自体、大変興味深い。しかし、いま問題にしたいのは、なぜそうなってしまったかである。

そして、[桃崎有一郎氏](#)は続けます。

その理由の一つは、右の規定（延喜式）に「門衛置くこと無し（門に警備員は置かれていない）」とあることから明らかだ。朱雀大路には、荒廃を取り締まる警備員がいなかった。

しかし、荒廃の理由はそれだけではない。その直前に「東西に坊を分かち」という文章がある。前述のように「坊」とは平安京の居住区の単位となった、町の集合体である。それを東西方向に「分けた」というのは、朱雀大路が町の集合体を東と西に（つまり左京と右京に）分断していることを意味しよう。「左右に垣を帯（たい）し、人居（じんきょ）相隔（あいへだ）つ。東西に坊を分かち、門衛置くこと無し」という部分は、朱雀大路と住宅地の間が、朱雀大路の両脇に立ち並ぶ高さ3.3mの垣で完全に遮断されていたため、左京と右京を完全に分断する絶縁体として機能し、人も物理的に出入りできず、従って警備員も置く必要がなかった、という意味に解釈できる。

下線部分に注目してください。朱雀門から羅城門までまっすぐに南北に伸びている朱雀大路、幅が約82mもある朱雀大路ですが、その朱雀大路を「横切る」道路は一本もないのです。京都市埋蔵文化財研究所の平安京図を見ると、朱雀大路を東西に横切る道路が何本もあるように見えますが、朱雀大路には高さが3.3mの壁がある（そして門がない）ので、朱雀大路には一般人はもとより貴族ですら入ることはできなかつたのです。

もちろん、前回『[潰される街路、宅地は拡大](#)』で触れたように、もともと朱雀大路は一般人・貴族が通るための道路として建設されていませんでした。あくまでも、外交使節がこの道を通り天皇に謁見するための道路でした。

ところが、この朱雀大路や羅城門が破壊されていくのです。嚴重に閉ざされた儀礼専用の空間であったはずの朱雀大路が、10世紀に入るまでに住民の牛馬の放牧地や、盗賊のねぐらとなっていたのです。[黒澤明監督の『羅生門』](#)では、盗賊のねぐらとして描かれていたのは有名です。

そして、羅城門と朱雀大路は使い道のない「開放的」な巨大空閑地と化していきました。一般民衆は街路に溝を引いて灌漑用水を開削するなどして「開発」し、道を田畠にしてしまったのです。

朱雀大路には南北に高い壁が造ってありましたから、東西の道路から朱雀大路には入れませんでした。警備員のいない羅城門から入っていったのでしょうか？[なぜそこに牛馬や盗賊が出入りできたのでしょうか？](#)

[それは、土で作られた垣（築地）の破壊が、比較的容易だったからです。](#)中国の羅城は数メートルも厚みのある壁で、高さも10mは当たり前という堅固な城壁でした。でも、平安京の場合は、そんなものもともと存在しませんでした。ということは、民衆が壁を破壊したのでしょうか。もちろんそういうことでは、それだけではありません。

さきほど、平安京のメンテナンスを行わなかった、と触れました。ということは、築地塀という壁が長年の風雨や台風（地震や火事もあったことでしょう）などが原因で壊れてしまい、その壊れた所が朱雀大路に入っていくことのできる、出入り自由な通路になっていったのでしょうか。いくら築地塀でも、

民衆の持つ道具だけでは、そう簡単に破壊できるものではないと思います。

つまり、本来の存在目的を失った平安京の再利用を始めたのは、摂関政治だけではない、ということです。**住民もまた、自分たちが使いやすいように、平安京を勝手に改造し始めていた**のです。

桃崎有一郎氏は次のようにいいます。

事実、取り締まり担当官として、「巷所（こうしょ）」の存在を認めてはならなかったはずの京職は、むしろその後、巷所の管理者に変貌してしまう。京職は中世に適応したのである。・・・・・・・・・・・・・・・・・・特に、東寺は立地を活かして、朱雀大路より東側の八条大路一帯の、至近距離にある巷所を次々と開発・集積し、重要な膝下所領として中世を通じて保持した。

ちなみに、「巷所」とは、もともと平安京の各条坊間の街路地であったものが、道路としての機能を失って宅地や耕地となったところ、をいいます。

上皇が捨てる

「外交の舞台」としての役割、「律令国家の劇場」としての役割を終えた平安京は、不要な部分を藤原氏のような権力者や住民に切り取られ、勝手に再利用され、それもできない部分は捨てられていきました。そして、平安京の中心である大内裏もまた、その流れから逃れることはできませんでした。大内裏もまた、過大で、実用性が乏しかったために、「無用の長物」として捨てられる運命にあったのです。

『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』で桃崎有一郎氏は以下のように述べておられます。

白河・鳥羽院政期・・・・・・・・は、律令制がとうに形骸化し、摂関が往年の権力を失っていたが、朝廷自体が衰退したわけではない。いわば、「魂（天皇）」が、自分を入れるために「肉体（平安京）」を造った時、自分を大きく見せるために大きく造りすぎたのであり、最初から薄々気づいていたその失敗を、「魂」の側がようやく告白できる時代になった、ということである。

・・・・、摂関政治期の藤原道長も、自分の権力を誇示する法成寺を造営するために、古代律令国家の理念の化石と言うべき、朱雀門の礎石を奪い去って再利用した。しかし、それは形式上の最高権威を天皇制に委ねつつ、これに寄生して権威を吸い取り、事実上の権力を目指すという、天皇制の利用者としての立場からの行為であった。

それに対して、白河法皇は元天皇であり、つまり天皇制そのものの立場から、大内裏不要論を口にした。天皇制のためだけに存在する設備を、天皇制の側が不要だと表明してしまえば、お終いではないか。

摂関政治期に平安京は大きく変質していきました。今度は院政期に変質していくことになります。それが、「六勝寺」など鴨川の東にそびえ立つ院の御所や寺院群です。

白河法皇にとって、鴨川の東岸に広がる都市域・白河とそこに並び立つ院の御所・寺院群は記念碑＝モニュメントと言えるものです。摂関政治期の藤原道長にとってのモニュメントが法成寺であったように。

それでは、**モニュメントが建立された地域はどのくらいの規模だったのでしょうか？**

白河法皇の御所は、四町規模の御所を南北に2つ並べ、八町もの敷地を占めていたといえます。これは、当時の堀河天皇が住んでいた二町規模の里内裏・堀川院の4倍も広いのです。歴史上最大の里内裏・高陽院より2倍も広いとのこと。

白河南殿の東に隣接して建てられたのが、得長寿院（とくちょうじゅいん）です。その東西一町×南北二町の敷地には、**三十三間の堂**が建ちました。

これって、誰が建てたのでしたっけ？いや、誰が寄進したのでしたか？

平清盛の父忠盛が寄進したのでしたね。

のちに、平忠盛の息子である**平清盛**が**後白河法皇**に寄進したのが「**蓮華王院**」、つまり今の**三十三間堂**です。



現在の蓮華王院（三十三間堂）



国宝になった千手観音像（1001体）

そして、二条大路末の南北に面して、名前に「勝」の字を持つ6つの寺院＝**「六勝寺」**が建立されていきました。白河の地は巨大な伽藍が林立する、前代未聞の宗教空間となっていたのです。

なぜ、白河の地に巨大な「六勝寺」が建立されたのかについては、以前、このホームページの『**日本史の本から歴史・伝統・文化を学ぶ**』シリーズの第9冊『**寺社勢力の中世**』で取り上げていますので、興味があれば、見てください。

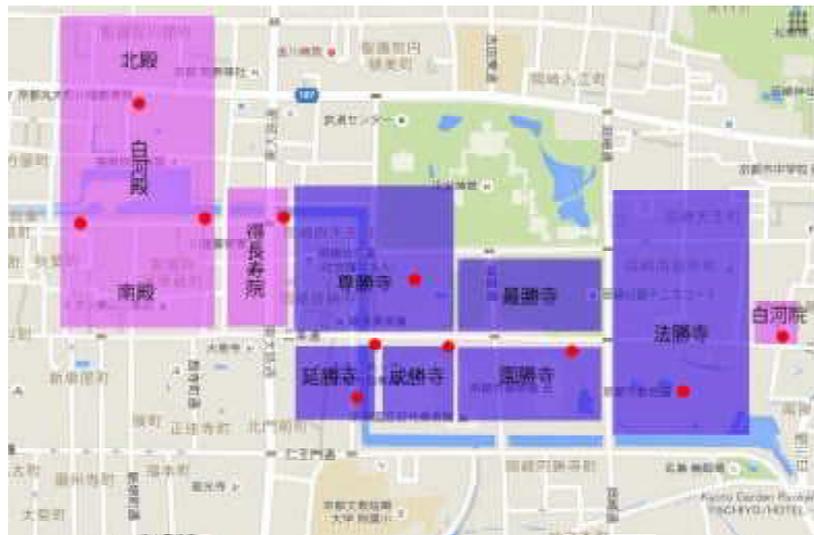
あ、そうそう。「六勝寺」って何ですか？全て答えられますか？

全て答えられなくても構いませんが、2つは答えられるようになってください。

白河天皇が建立した法勝寺（ほっしょうじ）、白河の子堀河天皇が建立した尊勝寺（そんしょうじ）の2つですよ。なぜかといえば、山川出版社の教科書『詳説日本史B』には、法勝寺と尊勝寺がちゃんと書かれてあるからです。

残りの4つですが、鳥羽天皇が建立した最勝寺（さいしょうじ）、鳥羽天皇中宮の待賢門院（たいけんもんいん）藤原璋子の建立した円勝寺（えんしょうじ）、後白河天皇の兄の崇徳天皇が建立した成勝寺（せいしょうじ）、そして最後が鳥羽法皇の子近衛天皇が建立した延勝寺（えんしょうじ）です。

ちなみに、下に現在の京都岡崎界隈の地図と六勝寺などの配置図をホームページ『京都散歩道』さん <http://kyotomichi.hatenablog.com/> より、お借りしました。どこに、何が建立されていたのか、一目瞭然ですよ。



さて、「六勝寺」のトップバッターが「法勝寺」でした。法勝寺は、二条大路末の東端にありました。

法勝寺といえば、その最大の目玉ともいえるべき巨大なモニュメントが建立されましたが、それは何でしょうか？

法勝寺の最大の目玉は、何ととっても永保3年（1083）に完成した、巨大な八角九重塔ですよ。記録によると、高さ27丈、なんと81メートルという驚くべき高層建築でした。

ところで、現在、高さ日本一の五重塔って、どこにあるもので、高さは何メートルなのでしょう？

答えは、京都にある東寺の五重塔（1644年建立）で、高さは約56mです。今から1000年近くも

前に東寺の五重塔よりもはるかに高い建築物が造立されたのです。ほんとにびっくりですね。

ちなみに、高さ81メートルを誇る法勝寺九重塔よりも高い建造物って、それ以後に造られたことはあるのでしょうか？

実は、応永6年（1399）に、足利義満が室町第（花の御所）の東隣の相国寺に建立した七重の塔がありました。一度焼失した後に義満の北山第（今日の鹿苑寺）に再建されましたが、高さは36丈＝109メートルもあったという話です。600年ほど前に、109メートルもの塔が京の都に建立されていたというのです。

現在、京都で一番高い建物は、京都駅前にある京都タワーで、高さは131メートルもあります。そこまでの高さはないものの、109メートルといえば、凄いですよね。京都タワーは鉄筋コンクリートですが、法勝寺も相国寺も東寺も、すべて塔は木造です。



白河法皇の法勝寺九重の塔（京都市平安京創生館）

では、法勝寺の八角九重塔はどこに建っていたか、わかりますか？

実は、現在は京都市動物園の観覧車が設置されている場所に建っていました。京都市動物園となっている法勝寺跡地の発掘調査が行われ、2010年、観覧車周辺の地下から、この九重の塔の地盤を固めるために整地された、八角形の地盤改良跡と瓦葺きであったことを証拠づける多数の瓦が発見されたのです。

この法勝寺は東海道・東山道沿いに建っていました。ということは、東海道・東山道を通って京へ上る人々は、京都に入るなり、法勝寺の八角九重塔を目にすることになりましたから、大いに驚いたことでしょう。

桃崎有一郎氏は、

白河法皇は法勝寺を「国王（天皇）の氏寺」と位置づけた。彼の世俗的権力と仏教（浄土信仰）的世

界観が融合した、新しい天皇制の権威を一目瞭然に示す、最大の装置としてこれを活用したのである。いわば九重の巨塔は、中世という新時代の朝廷を支配する白河院政の権力・権威をこれでもかと誇示する、新時代の国家の拠点＝「京・白河」の記念碑であった。

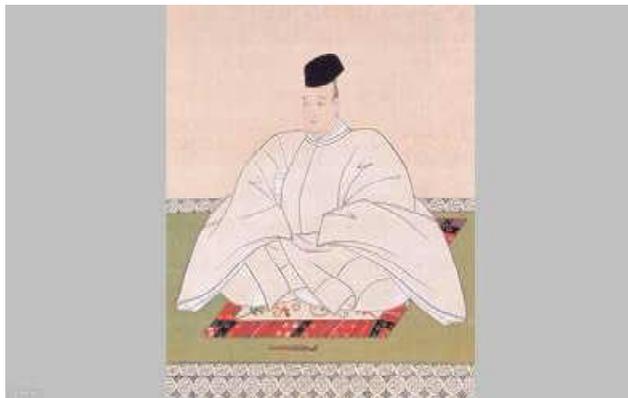
と述べています。

それに対して、視点を鴨川の東から西の方へずらしていくと、大内裏の貧弱さが目立ちます。何よりも大内裏は京の都の繁華街からはずいぶん離れたところにありました。法勝寺九重塔のような目立つモニュメントもなく、いわば過去の遺物のような存在に成り下がっていました。

2019年5月に、元号が「平成」から「令和」に変わり、新天皇が誕生しました。明治以降は、前天皇が亡くなられてはじめて新天皇が即位できましたから、**今上（きんじょう）天皇**と上皇が同時に存立するという事はなかったのですが、久しぶりの上皇の誕生でもあります。

では、ここで質問です。少し前にニュースなどでも取り上げられていましたので、あなたも記憶しているかもしれません。**最後の譲位は今から203年前、江戸時代後期の1817年に行われました。仁孝（にんこう）天皇に譲位された前の天皇は誰でしょうか？**

答えは、光格（こうかく）天皇でした。光格上皇は、基本的に政務は行わず、和歌や管弦など皇室の伝統文化の継承や学術の奨励に努めたということです。



光格上皇の肖像画

今回、上皇が退位されて、現在の天皇が即位されていますが、新天皇夫妻と上皇夫妻は当然のことながら、別の場所に住んでおられます。

昔、古代においても、退位した元天皇（上皇）の住まれる宮と現天皇の内裏は分離・独立しているのが基本でした。現在の京都御苑にも、内裏と**仙洞御所（せんとうごしょ）**がありますね。

仙洞御所とは譲位された天皇、つまり「太上天皇（上皇）」「法皇」の御所のことです。「仙洞」って何かというと、本来は仙人の住み処をいうそうです。そこから転じて、太上天皇や法皇の御所をいい、

さらに転じて太上天皇・法皇の異称としても使われました。退位した天皇の住まいの美称として用いられるようになったため、貴人の住まいを「御所」ということから「仙洞御所」と呼ばれました。

ところが、院政期のこの時代、異常事態が起きていました。それは、白河法皇と鳥羽天皇が「同居」していたのです。

白河法皇は息子の堀河天皇が在位中に亡くなった時、自ら**重祚**（ちょうそ。上皇が再び天皇になること）を望みましたが、すでに出家していた自分ではそれが叶わないので、孫（堀河の子）の鳥羽を天皇として、「陣ノ内」に仙洞（院御所）を設けて政務を行ったといえます。

白河法皇は天皇と同居しなかった時期でもなお、内裏に隣接する場所に御所を設けて、そこに摂関家の中心人物（のちに摂関になる）の**藤原忠通（ただみち）**を日参させ、補佐役として活用しながら、政務を取り仕切っていました。



京都御苑案内図
宮内庁より

この点に関して、**桃崎有一郎氏**は

そこまでして白河院が鳥羽天皇と物理的・地理的に一体化しようと目論んだ理由は1つしかない。白河院が権力を振るった「院政」という政治形態は、「若く（幼く）」て政治を十分に行えない天皇に代わって、父や祖父である元天皇が、家父長として天皇家を代表し、天皇を庇護・後見する立場から、「治天となって自ら政治を行う」体制であった。この親（や祖父）として天皇を庇護・後見するという一点こそが、院政の権力の源泉である。そこで院政を行う治天がそれを最もわかりやすく、万人の目に見える形で物理的に表現したのが、「治天が天皇に寄り添って同居する」という形なのである。

さらに、こうも述べています。

かくして白河法皇が鳥羽天皇と物理的に寄り添う形を必須とした以上、「天皇が院から独立して平安京内裏に住む」ということはあってはならない。平安京の物理的な構造に反映されるべき権力・権威の形は、天皇が一人で屹立（きつりつ）する大内裏ではなく、天皇が治天に抱きかかえられるように庇護

されて同居する形でなければならず、したがって内裏（天皇）に院御所（治天）が寄り添う形式でなければならない。そうすると平安京（大内裏）は、院政という新時代の政治形態にとって、無用どころか有害なのであった。そのため院政を敷く治天は、大内裏の修造・活用の議論が起こると、なんと積極的にそれをつぶした。

平安中期まで頻々と発生した平安京内裏の焼失が、康和二年（1100）の再建から承久元年（1219）までの119年間、ぴたりとやんだのはなぜか？それは、その間、天皇が住まず、そこで火を使わなかったからだ。・・・平安京内裏は消極的に使われなくなったのではなく、院政によって積極的に捨てられたのである。

というわけで、白河法皇が大内裏に対して、いわば「引導を渡した」のです。命脈を終えようとする古代と心中しないため、来たるべき中世という新時代に天皇制が適応して生き延びるためには、天皇制の側が「大内裏はもういらぬ」と、明言しなければなりません。白河法皇はその責務を果たし、次の時代へと踏み出していったということになります。

まとめ

このシリーズの最初に紹介しましたが、『平安京はいらなかった』の「帯」の言葉を再度掲載します。

「使いにくい平安京は何のためにある？もてあます朝廷、捨てたがる法皇、破壊する住民」

この帯のフレーズこそ、**桃崎有一郎氏**が『平安京はいらなかった』の中で言いたかったことなんですね。

まず、平安遷都からそれほど経っていない段階で、京の住人が生活の利便性のため、平安京を破壊・改変し始めていました。ということは、

平安京は造営された最初から、発展させるところか、作っては壊され、破壊者を罰して修復してもまた壊されるという、内部からの破壊行為と戦い続ける、いたちごっこを宿命づけられていた。平安京全体が規格通りの正しい姿をした完成形を見られる日は、絶対に来ないことが決まっていたのである。

また、平安京を造った側と住む側との間に、相容れない利害対立があったことが明らかですよね。造営した朝廷側の意図を忠実に守ると住民は暮らしにくいのであり、住民が暮らしやすくすると平安京は破壊されざるを得ないという、都市として致命的な矛盾を、平安京は最初から抱えていたのですね。

平安京は、住人にとって実用性を犠牲にせねば維持できない都市であった。それはつまり、平安京が最初から実用性を犠牲にすると割り切って設計された都市であったことを意味する。・・・

都市民が生活しなければ成り立たないはずの都市が、住人の利便性を犠牲にして設計されていたことは、後にその姿を保てなくなった平安京最大の敗因である。

と、[桃崎有一郎氏](#)は主張しています。

住民だけではなく、藤原摂関家が、そして王家が、桓武天皇が造成した平安京を徐々に、徐々に潰していきました。その後も、応仁の乱をはじめとする戦乱、また地震や大火などのために京の町は変貌を遂げていきました。特に豊臣秀吉の造った御土居で京都の景観は大きく変わりました。羅城が存在しなかった都に、突如、羅城とも言うべき大きな御土居が設けられてしまったからです。

朝廷は持て余し、法皇（王家）は捨てたがり、住民は破壊したがった、使い勝手の悪い平安京。「平安京凶」のようなものは想像であり、完成を見ることのなかった平安京。敵の侵入を防止するための羅城を造らなかった平安京。

しかし、平安京は人口から見ても巨大すぎたのであり、天皇の権威を示したり外交使節を出迎えたりするめに造られた不要な人工物でしかなかったのかもしれませんが。しかし、その都で天皇家（王家）や藤原摂関家や、武士や住民たちが日々生活を行い、歴史を作ってきたことは間違いありません。人々の生活や体験そのものが、日本の歴史や文化、伝統を形作っていきました。

その意味では、とても重要で必要な建造物であり、居住空間だったと言えるのではないのでしょうか。

今回もお読みいただき、ありがとうございました。

